

「温泉旅行の近現代」

一橋大学大学院経済学研究科
高柳友彦

本報告の課題

本報告では、昨年11月に出版した拙著『温泉旅行の近現代』をたよりにして、近代以降の温泉旅行のあゆみを報告する。また、本書で掲載できなかった資料や事柄や近年の温泉地の動向についても紹介する。

内容

- 1、本書の内容の概観
- 2、本書で明らかにした点



今日、ご紹介する文献

『温泉旅行の近現代』
吉川弘文館、2023年

近世から現代にかけての温泉旅行を、観光行楽面と湯治療養面から考察した通史。

本書では、近現代日本において、人々が温泉を楽しむというスタイル(=温泉地を旅行する)が、いつごろから登場し、余暇の過ごし方の一つとして定着したのか。また、温泉地が旅行先として、観光遊興の場(楽しむ場)として選ばれるようになった歴史的背景や過程を考察している。

温泉旅行の歴史について

- ①「誰と」温泉に行くのかという温泉旅行を楽しむ主体
- ②人々が、どのような情報を得るとともに、どのような交通機関を利用して移動したのかなど、温泉旅行を支える仕組み
- ③温泉地での過ごし方や費用

以上の3点に注目し、その歴史的変容過程を明らかにしている。

本書の位置

これまで温泉や旅行に関する一般向けの通史

石川理夫『温泉の日本史』(中公新書)・・・主に前近代を対象
白幡洋三郎『旅行ノススメ』(中公新書)・・・第二次世界大戦以前

本書では、近世末期からコロナ禍の影響を受けた2020年代初頭までの射程の長い時期を対象とし、また、戦後日本における旅行ブームの展開と温泉地の発展・停滞の歴史とのかかわりを考察

多くの人々が経験する温泉旅行に関する初めての通史であり、温泉旅行に関わる地域、産業、消費など幅広い観点から描いた点、加えて、上記の研究では触れられていない高度経済成長期以降の時代を扱っている点が特徴である。

本書の目次

温泉旅行という文化一プロローグ

温泉旅行の黎明 江戸・明治期

大衆化する温泉旅行 大正・昭和戦前戦時時期

再興してゆく温泉旅行 昭和戦後期

多様化する温泉旅行 1970年代以降

コロナ禍、そしてこれから一エピローグ

温泉旅行の黎明 江戸・明治期

近世社会において「旅」することはかなり普及していた。農閑期には農民が湯治療養を行う。また伊勢参りに代表される寺社参詣も盛んにおこなわれる。

身分による旅の違い

大名は大量の供を連れての旅や湯治...費用もかかる
藩士や寺院の僧侶らは2、3週間程度の湯治を実行
守山藩(現福島県郡山市域)の領民は、18世紀初頭から160年間で4000人が温泉旅行を目的に領外へ、遠方では和歌山、近隣では福島、栃木、山形の温泉地が選ばれる。
大名身分の奥方やそれ以外の女性の旅は様々な点で困難が多い
・・・関所での女改め、年齢層の高さ、子育てや主人との関係 富裕層は従者を連れての旅

明治期

明治初期までの温泉旅行は、基本、徒歩での移動
・・・温泉地での長期間の滞在、二・三週間におよび湯治療養が中心、
⇒その後の鉄道開通は、温泉旅行のありようを大きく変化
時間短縮、費用軽減、旅の安心など

『温泉案内』の出版=近世までの温泉番付に変わる
→アクセス、旅館一覧、費用等、温泉地の概要、周辺の名勝旧跡
宿舎の具体的な設備(内湯の有無や源泉について)

娯楽や観光よりも療養を目的とした利用が主で、近世から続く湯治に加え、西洋医学を前提とした療養も展開していた。

大衆化する温泉旅行 大正・昭和戦前戦時時期

第一次世界大戦前後から1920年代までの温泉旅行
・・・療養目的が主 どういった症状のもとでどの温泉地を選ぶのか?
療養するためのガイドが不可欠⇒療養地紹介の案内の登場

長尾折三(藻城)編『日本転地療養誌』(1910年)

転地療養の適地として全国の海水浴場や温泉療法ができる温泉地を網羅的に紹介・泉質、効能、気候ごとの温泉療法の詳細な方法 それぞれの温泉地の泉質と概要

『日本温泉案内：保養遊覧 附・入浴者の心得』(1917年)

『温泉案内』(1920年)・・・全国の温泉地の特徴や旅館の状況、具体的費用、主要都市からの交通アクセスが記載

日帰り温泉施設の登場
観光・行楽を目的とした旅行として、日帰り、一・二泊程度の滞在

鉄道会社が手掛けた温泉レジャー
遊園地や観光施設に併設された日帰り入浴施設
箕面有馬電気鉄道(社長の小林一三)が整備した新宝塚温泉
…劇場、遊園地、植物園、運動場などを備えたレジャーランド

大阪電気鉄道(現近鉄)あやめ池遊園地に「あやめ池温泉場」
生駒山に遊園地、大阪府南部の長野線でも「汐ノ宮温泉」を開業
東京では、現東急沿線に多摩川園 綱島温泉浴場が建設

温泉地の観光地化
遊園地を併設した温泉施設や景観を売りにした観光施設の登場
別府八景の鶴見ヶ丘の一角を開発した「鶴見園」(1925)
…入場料大人40銭、子ども20銭(1921年の映画館入場料30銭)、

ケーブルカーを設置した「別府遊園地」(現ラクテンチ)(1929)
地獄巡り(噴き出した温泉を見物できる施設へ)の普及
亀の井バスによる観光遊覧バスの実施

旅行費の低廉化と標準化
…「クーポン式遊覧券」の発行
乗車券や乗船券、自動車券、宿泊での旅館券が一冊にセット
(省線の鉄道運賃割引や旅館での茶代不要を明記)

1930年代の温泉旅行
昭和恐慌の影響から温泉地の利用客数は減少、その後重化学工業の発展の下、都市部を中心に早期に景気回復を実現。
…温泉地の利用客は主要温泉地50ヶ所の利用客数が約2300万人

招待旅行の普及
商店や諸団体が企画した旅行に関係者を招待する招待旅行の登場
激しい販売競争を展開していた新聞業界でも、読者向けに実施

東京神田の横山町での招待旅行
1934年 伊豆巡りの2泊の温泉旅行、日光鬼怒川温泉、
35年 諏訪温泉と霧ヶ峰のスキー、富士五湖巡りと箱根温泉

積立旅行の普及
月掛旅行会…会費を月賦にして積立旅行する仕組み
小松駅で主催された「日本旅行協会小松月掛倶楽部」では、毎月一〇一円の金額を徴収し、年十二円が積み立てられ、使用しなければそれが繰り越されていた
毎月旅行が企画され、伊勢神宮や善光寺参り、白浜温泉、箱根、伊豆、下呂温泉、城崎温泉、宇奈月温泉などの温泉地へ
宇奈月温泉一泊二日約7円 奈良・白浜・和歌浦2泊3日約30円

山水旅行会(東京市内の積立会)
一月一円ずつ一年間積み金予約→契約する全国50ヶ所の旅館に5泊できる(13円で5泊)仕組み。積立した一泊分の2円60銭のうち、外交員の歩合が15%、また旅館から同会に支払われる口銭は5%

戦時期の温泉旅行
軍需景気のもと、1939年年始の温泉旅行客数が激増

「温泉報国」の浸透…帰還兵や傷病兵を優遇する仕組み
『温泉療養実話集』(1939年日本温泉協会と日本旅行協会が出版)
数百人の体験記を収集し、14種の病気と39人の体験記を掲載
病気は、胃腸病、神経痛、皮膚病、婦人病、脚気、喘息、糖尿病

どのような病、温泉地を選んだ経緯、宿泊先、期間、費用などの情報

再興してゆく温泉旅行 昭和戦後期
空襲被害の多い都市と食糧供給地の農村=都市住民が動けない

温泉地の復興
1947年秋～伊豆の温泉地が満員=占領下、富を築いた「新興成金」

招待旅行の再開
温泉招待旅行は、半年に一回のペースで開催
東京に近い、湯河原、熱海、伊東、修善寺といった温泉地が行先
それぞれの温泉地は、団体での温泉旅行を受け入れることで宿泊客数を増加させた

高度経済成長前夜の温泉旅行
東京から伊豆へ直通する優等列車
1952年土曜日四本の準急(関西では毎土曜日に紀勢線白浜口行、東武が鬼怒川、日光へ、小田急が箱根に)
→休日を挟んだ連休に旅する(祝日と日曜をはさんだ三連休は貴重)

温泉療養の展開
戦後復刊した『温泉』に毎月、療養相談のコーナーが登場
温泉療法の紹介 家庭にあるたらいや桶を利用した温浴療法

国民保養温泉地の誕生
湧出量が豊富で、環境衛生、景観、気候、医療休養施設などが優れ、利用料金が低廉などの要件を備えた温泉地

ヘルスセンターの登場
1955年11月、千葉県船橋市に船橋ヘルスセンターが誕生
舞台付きの大広間、百坪のローマ風呂、温泉露天プール、
⇒ヘルスセンターブームの到来、約10年間に全国150ヶ所以上誕生

温泉地のヘルスセンター
定山溪、登別(北海道)、東山、湯本(福島)、那須、鬼怒川(栃木)、伊香保(群馬)、戸倉上山田(長野)、和倉、山代(石川)、有馬(兵庫)、三朝、皆生(鳥取)、道後(愛媛)、武雄、嬉野(佐賀)、指宿(鹿児島)

1960年代初頭の旅行消費(1960年、3000名の調査)
国民の約半数(46%)が過去一年間に一泊二日以上旅行
全体の34%が慰安観光旅行を経験。家族旅行は三分の一程度

団体旅行の主権は、職場や地域団体(婦人会、町内会を含む)
60代以上の女性の半数が団体旅行を希望、20-30代は20%程度
職種の違い…都市部のサラリーマンは小人数旅行を希望

温泉地の拡大
利用者数1957年4070万人→1964年8737万人へ、
←交通機関の整備 旅行会社の施策、旅行会社の誕生
メディアの宣伝(雑誌の発売)、ラジオやテレビ

団体旅行の発展・・・招待旅行、従業員を連れた職場旅行
 職場旅行は、従業員の費用負担は多くない
 (企業の福利厚生費や従業員の積立)

家族旅行の普及
 雑誌での家族旅行の推奨プラン
 大都市を起点とした一泊二日、二泊三日の旅行プランが提案

レジャー施設の登場
 1960年代後半以降、家族を中心とした旅行の行先として
 温泉施設と融合したレジャー施設が建設
 熱海後樂園、ナガシマスパーランド、常盤ハワイアンセンター

多様化する温泉旅行

秘湯一軒宿のブーム
 1960年代から東北地方の秘湯がとりあげられる 秘湯紹介の記事
 1975年に日本秘湯を守る会が設立
 →利用客が増加することで「秘湯らしさ」が失われることに

家族旅行とマイカー
 家族旅行の増加(967万人→2529万人へ)
 ドライブ旅行へ＝モータリゼーションの進展・マイカー所有の拡大
 温泉地近くに観光施設(サファリパークなど)

ひとり旅・女性の旅
 女性・ひとり旅がキーワードに
 旅館側で忌避されていたものの、『anan』や『nonno』などの女性雑誌で特集されるようになると、女性客が増加し、旅館も対応に

宿泊客の増加と温泉地の拡大
 1964年8737万人→1970年1億126万人→1973年1億1791万人へ
 1980年代半ばまで1億1000万人前後を推移

温泉地の利用客数 1960年代から1970年代
 別府・熱海・箱根・白浜・伊東・鬼怒川
 大都市圏に近接する温泉地・地方都市の奥座敷

表1 一〇〇万人以上の観光客が訪れる温泉地

温泉地	1968年(昭和43年)		1973年(昭和48年)		1978年(昭和53年)	
	温泉地	観光客数	温泉地	観光客数	温泉地	観光客数
1. 湯田	497	1,000	1. 湯田	947	1. 湯田	520
2. 別府・伊豆山	411	2,000	2. 別府・伊豆山	472	2. 別府	418
3. 箱根湯湖	294	3,000	3. 箱根・伊豆山	428	3. 箱根	290
4. 伊豆	238	4,000	4. 伊豆	323	4. 白根	243
5. 伊豆	190	5,000	5. 白根	224	5. 高根岡	241
6. 湯田	171	6,000	6. 湯田・湯	143	6. 伊豆	222
7. 湯田・湯田	170	7,000	7. 湯田	143	7. 湯田	188
8. 湯田	168	8,000	8. 湯田	143	8. 湯田・湯	148
9. 湯田	147	9,000	9. 湯田	143	9. 湯田	128
10. 湯田	142	10,000	10. 湯田	143	10. 湯田	124
11. 湯田	106	11,000	11. 湯田	143	11. 湯田	121
12. 湯田	104	12,000	12. 湯田	143	12. 湯田	119
13. 湯田	100	13,000	13. 湯田	143	13. 湯田	116
14. 湯田	100	14,000	14. 湯田	143	14. 湯田	116
15. 湯田	100	15,000	15. 湯田	143	15. 湯田	116
16. 湯田	100	16,000	16. 湯田	143	16. 湯田	116
17. 湯田	100	17,000	17. 湯田	143	17. 湯田	116
18. 湯田	100	18,000	18. 湯田	143	18. 湯田	116
19. 湯田	100	19,000	19. 湯田	143	19. 湯田	116
20. 湯田	100	20,000	20. 湯田	143	20. 湯田	116
21. 湯田	100	21,000	21. 湯田	143	21. 湯田	116
22. 湯田	100	22,000	22. 湯田	143	22. 湯田	116
23. 湯田	100	23,000	23. 湯田	143	23. 湯田	116
24. 湯田	100	24,000	24. 湯田	143	24. 湯田	116

注：1978年のデータには湯田温泉が含まれていない(1978年は29万人)
 出典 「全国温泉地の観光客数(1)(2)」『温泉』96巻7号、1997年。

温泉利用による治療・療養

国民保養温泉地(1973年57カ所→78年64カ所へ)
 「温泉療法」はあまり普及しないが、一定数温泉療養を志向
 雑誌『温泉』上での「温泉療養相談」の企画
 →温泉療養への関心から、様々なガイドブックが出版

見直された温泉療養
 ノイローゼ・むち打ち症・神経性胃炎といった「現代病」の存在
 1976年日本温泉気候物理学会が「温泉療法医」を設定
 →1980年代、健康ブームの中、湯治とは異なった療養・健康増進の
 観点からの温泉利用 一方で湯治場の利用のありようは変化

国内旅行の拡大
 1988年1億3086万人→91年1億4285万人へ

各種公共団体が建設・運営する「公共の宿」が登場
 ...国民休暇村・勤労福祉センター(いこいの村など)
 簡易保険保養センター(かんぼの宿・現亀の井ホテル)
 グリーンピア・厚生年金休暇センターなど数多く存在

→民間では、サービスの多様化や施設の更新・高級化が求められた
 施設のデラックス化 露天風呂の充実、名物料理の登場

⇒「温泉地へ行く」というよりも、温泉旅館・ホテルに「宿泊に行く」とい
 う意識に変化。旅館の風呂、施設、料理のよし悪しで温泉地が評価

バブル崩壊とその影響
 1993年1億4325万人→2000年1億3752万人へ
 静岡県・群馬県の減少が著しい
 →寮・保養所の減少と会員制福利厚生施設などへの転換

日帰り温泉施設の増加
 地域おこし、ふるさと創生基金の利用、第3セクターの経営など
 ...高速道路沿いや有名温泉地の近隣に作られる

1990年代後半以降の不況と旅館の倒産
 大規模温泉地のホテル・旅館の廃業、倒産が増加
 ...客の想定する価格帯と旅館が提供するサービスとのずれ

2000年代の温泉地の模索
 地域おこし...草津・別府 温泉を中心とした取り組み

インターネットの普及
 温泉地からの手軽な情報発信 宿泊予約サイトの登場
 温泉旅行の体験の発信→「口コミ」の重要性

温泉旅館の再生
 巨大旅館ホテルの廃業→安価な施設としてリニューアル
 老舗旅館の廃業→高級旅館としてよみがえる

2010年代を通じて、宿泊客数は伸び悩む(約1億3000万人)
 地震・火山噴火などの災害

コロナ禍の温泉旅行
 温泉地の延宿泊利用人員数は、
 2019年度1億2600万人→2020年度7659万人へ減少
 →温泉地では様々な取り組みが行われる

2020年から2022年にかけての動向
 繰り返される緊急事態宣言、その後に展開される旅行支援
 2020年よりも2021年の数字が悪い＝旅行の縮約の多さ
 →利用客数の動向に影響し、2019年の水準に戻ることが難しい
 (単発的に2020年秋などはGOTO事業で客数は増加)

温泉旅行の費用の比較
近世・明治期には温泉旅行はまだ費用がかかる

安価になる時期は、1920年代
交通費の低下、クーポン券の登場
積立による旅行、団体(招待・職場)旅行
高度成長期以降
余暇の中でも気軽にできる地位に展開

本書で明らかにした点

①温泉旅行がレジャーに取り込まれていく過程
レジャーの普及は1920年代から進展
余暇を楽しむ場として 宝塚や別府、温泉と遊興施設がセットに
療養目的からレジャーを楽しむ場へ転換する高度成長期
ヘルスセンター(船橋ヘルスセンターを嚆矢)の流行
1970年代までに温泉地はレジャー旅行の行先の一つとして選択
旅館・ホテルに遊興施設がつけられるとともに、近隣には、観光ス
ポットが設けられる→家族でドライブ旅行をするように

しかし、1980年代以降、レジャーの多様化や施設の大型化など、
温泉地にいかになくてもレジャーを楽しめる場が登場

表1 温泉地・近郊地における宿泊客数の推移

月	2019年		2020年		2021年		2022年		2023年		2024年	
	客数	前年比	客数	前年比	客数	前年比	客数	前年比	客数	前年比	客数	前年比
1月	238,134	233,760	108.1%	178,829	184,901	67,882	160,339	104.5%	128.2%	90.8%		
2月	241,187	230,489	95.6%	178,383	178,700	64,371	157,822	103.7%	39.8%	81.0%		
3月	218,200	198,886	91.2%	205,858	184,824	137,813	175,483	98.4%	81.7%	64.3%		
4月	246,298	23,848	13.5%	191,177	29,861	93,867	194,473	15.8%	81.8%	181.7%		
5月	243,828	24,209	10.0%	184,904	18,971	94,821	183,444	8.2%	30.8%	100.8%		
6月	223,908	66,159	29.7%	171,227	76,332	82,818	198,660	44.8%	48.2%	81.9%		
7月	204,207	115,823	56.8%	179,077	161,287	145,428	178,648	78.2%	89.1%	87.9%		
8月	172,814	214,351	97.8%	210,819	198,846	121,129	188,787	85.4%	87.8%	82.2%		
9月	238,298	198,886	87.8%	183,230	188,074	94,452	188,684	74.0%	81.8%	90.3%		
10月	218,817	178,777	82.0%	173,815	171,619	123,186	182,852	98.7%	70.8%	105.1%		
11月	224,803	210,664	79.4%	187,870	188,868	168,775	187,208	99.8%	89.5%	98.8%		
12月	178,828	181,670	87.1%	218,114	199,892	178,288	183,296	74.0%	81.8%	87.0%		
合計	2,118,188	1,838,824	86.9%	2,251,877	1,890,486	1,328,840	2,671,987	71.1%	88.9%	82.0%		

出典 温泉地・近郊地における宿泊客数の推移

1990年代以降、温泉地がレジャーを楽しむ場となくなるなか、景気後退の影響もあり、温泉地は苦境に
(レジャーは都市部のテーマパークなど、温泉地ではない場所へ)

1970年代までは湯治療養は根強く残るものの、医療制度が充実する中で、徐々に利用は減少傾向に

ただ、現代病の登場は、湯治療養に新たな役割を付与し、一部の温泉地では利用客が回復。ただ、ローカル圏の湯治場は厳しい状況に。

②バブル崩壊以降の温泉地の停滞

温泉地の利用客数は、
1993年1億4325万人→2000年1億3752万人へ減少
…1990年代後半、巨大温泉地を中心とした停滞のはじまり
多くの旅館・ホテルの廃業、2000年代以降も続く停滞
2002年1億3701万人→08年1億3586万人→10年1億2492万人
100万人以上の宿泊客数の温泉地=90年27ヶ所→2010年13ヶ所
2001年を100とした場合
10年の宿泊客数が90～99の温泉地…13カ所 80～89、18カ所
70～79、21カ所 69～60、15カ所 60未満、7ヶ所
八割近くの温泉地で宿泊客数が減少
=温泉地間の競争激化や不況の影響で宿泊客数が急減

温泉地によっては、宿泊客数の減少が顕著
那智勝浦 1995年111万人→2005年96万人→2010年69万人
塩原温泉郷 118万人→91万人→84万人
水上 130万人→73万人→58万人
湯河原 134万人→83万人→61万人

バブル崩壊以降、団体旅行が減少、寮・保養所の減少
宿泊客のニーズの変化に対応できない(家族・個人)
(設備投資も厳しく、メインバンクも経営難)

温泉旅行がレジャー旅行の一つであった時代がおわり、レジャーは大都市の観光施設に集中。目玉となる施設・資源がない温泉地は、利用客数の減少に苦しむことに。
=そもそも国内旅行の旅行客数は伸び悩む(=インバウンドは増加)

温泉地	1990年(平成2年)		1995年(平成7年)	
	温泉地	宿泊客数	温泉地	宿泊客数
1 那智勝浦	479	1 那智勝浦	411	
2 別府	432	2 別府	410	
3 湯河原	327	3 湯河原	308	
4 船橋	310	4 船橋	288	
5 伊豆	248	5 伊豆	231	
6 白川	221	6 白川	200	
7 湯治療養	206	7 湯治療養	179	
8 湯治療養	181	8 湯治療養	176	
9 石和・春日唐	172	9 石和・春日唐	172	
10 下呂	169	10 下呂	162	
11 伊香保	157	11 石和・春日唐	150	
12 山代・別所新出買	156	12 湯河原	150	
13 山代	154	13 山代・別所新出買	148	
14 船橋	151	14 船橋	136	
15 湯河原	144	15 湯河原	136	
16 湯治療養	143	16 湯治療養	129	
17 湯治療養	138	17 湯治療養	129	
18 湯治療養	137	18 湯治療養	120	
19 湯治療養	130	19 湯治療養	120	
20 湯治療養	124	20 湯治療養	119	
21 湯治療養	119	21 湯治療養	118	
22 湯治療養	111	22 湯治療養	111	
23 湯治療養	111	23 湯治療養	109	
24 湯治療養	110	24 湯治療養	107	
25 湯治療養	107	25 湯治療養	107	
26 湯治療養	107	26 湯治療養	107	
27 湯治療養	106	27 湯治療養	104	
合計	808	合計	4705	

出典 温泉地・近郊地における宿泊客数の推移

2000年(平成12年)		2005年(平成17年)		2010年(平成22年)	
温泉地	宿泊客数	温泉地	宿泊客数	温泉地	宿泊客数
1 湯河原	448	1 湯河原	430	1 湯河原	465
2 別府	402	2 別府	400	2 湯河原	289
3 湯河原	298	3 湯河原	295	3 湯河原	251
4 湯河原・川治	270	4 伊豆	273	4 伊豆	258
5 伊豆	192	5 湯河原・川治	195	5 湯河原	177
6 湯河原	187	6 湯河原	192	6 湯河原・川治	176
7 白川	185	7 白川	189	7 白川	174
8 湯河原	158	8 湯河原	143	8 湯河原	148
9 湯河原	144	9 石和・春日唐	132	9 石和・春日唐	149
10 伊香保	136	10 湯河原	131	10 湯河原	116
11 湯河原	127	11 湯河原	128	11 湯河原	102
12 下呂	120	12 湯河原	128	12 伊香保	101
13 湯河原	119	13 湯河原	120	13 湯河原	101
14 湯河原	113	14 伊香保	111		
15 山代・別所新出買	111	15 下呂	108		2477
16 湯河原	111		3050		
17 石和・春日唐	110				
18 湯河原	110				
19 湯河原	106				
20 湯河原	104				
合計	3532				

出典 温泉地・近郊地における宿泊客数の推移

近年、客足が戻る温泉地も登場…別府や熱海など
→ただ、バブル期の利用客数は回復できていない
(その点、草津はバブル期の水準を超えてきている)

一方、都市部のビジネスホテルでは温泉大浴場を設ける施設が増加
=温泉を楽しむ場は、日帰り施設も含め、この間、増加している。
人々は温泉に触れる機会は多くなっている。
ただ、旅行先としての温泉地を訪れる人が停滞している状況

温泉を利用できる場が増える一方で、既存の温泉地の苦境
=今後の温泉地のありようをどのように考えていく必要があるのか?